



日体大リポジトリ

## 序文

著者	日本体育会百年史編纂委員会
雑誌名	学校法人日本体育会百年史
発行年	1991-10-28
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1444/00001071/">http://id.nii.ac.jp/1444/00001071/</a>

# 百年の日体を祝う

学校法人日本体育会 理事長 米本 正

一九九一年（平成三年）十月二十八日、日本体育会は創立百周年記念式典を日本武道館に於いて、皇太子浩宮徳仁殿下の御来臨を仰ぎ、井上裕文部大臣、鈴木俊一東京都知事を始めとする内外の体育・スポーツ科学の権威者をはじめ多くの貴賓のご列席を戴いて盛大に挙行了た。

百年の歴史を想うに、我が国にとってその前半は先進列国に伍するための文字どおり血のにじむ近代化の時期であり、第二次世界大戦をはさんでその後半は、戦渦の灰塵からの復興が世界最高水準の「経済大国」にまで発展してきたのであるが、日本体育会にとってもまたこの百年は幾多の苦難と試練を経験しながらも輝かしい体育・スポーツの全盛期の実現への長い道程であった。

一八九一年（明治二十四年）、体育による国民体力の増強や健康の増進を図るため、優秀な体育指導者養成の目的で日高藤吉郎により創設された「体育会」は、いまや世界に冠たる日本体育会として発展してきた。在学生六千余、卒業生五万余を数える日本体育大学、日本体育大学女子短期大学を基幹として、日体荏原、日体桜華、柏日体、浜松日体の高等学校と、日体幼稚園、日体柔整専門学校を有する一大学校法人となった日本体育会は、学校体育・社会体育の指導者の育成にあたるのみならず、乳幼児から高齢者に至る生涯の体力と健康の維持増進のために重要な推進的役割を果たすと同時に、多くの世界的なスポーツ選手を輩出して我が国近代スポーツのメッカとなっている。

しかしながら、二十一世紀へ向けてのこの最後の十年間は、「健康で将来の不安なしに、快適で文化的な環境で生活し、自らの選択に基づいて自己実現を図る」ことを願う国民の生活ニーズに対して豊かさを実感できる「ゆとり社会」への発展が望まれ、教育の場においても国民の意識や生活の多様化、技術革新、国際化・情報化の進展、産業構造の変化等に加えて画期的な高齢化と児童・生徒の激減期を迎えての新たな変革が要請されている。日本体育会はこのような時代にあつてこそ、文化・経済・技術をしてゆとりの基である生きとし生ける者の健康・体育を希求し続けてきた創設の精神と社会的な貢献を再確認し、二十一世紀を迎えるための決意を新たにするのである。

創立百周年の記念事業として企画された大学及び各設置校の施設の整備充実と、教育・研究の質的向上の努力は、着々と進行している。このような時期にあたり、ここに『百年史』を編んで上梓することには絶大な意義を見出すことができる。歴史は創り出すものである。ただ漫然と時を刻むのではなく、偉大な先人の労苦と偉業を知って新たな創造の糧とし、この一日とさらなる次の一日を記録の更新へ向かつての挑戦として創り上げなければならぬ。古きを温ねて新しきを知り、日体精神である「体育は富強の基なり」が「質実剛健」「団結和協」の校風のもとに実証されてきた脈々たる流れを、さらに限りなく展開させて行きたいものである。

連日深夜に至る編纂の作業に耐えてその成果を結実された若い日体のエネルギーに深く謝意を表するとともに、この『百年史』が日体の、そして日本の体育の歴史を知るための座右の一書として伝承されることを祈念するものである。

# 健やかに明るく、穰り豊かで平和な社会を

日 本 体 育 大 学  
日本体育大学女子短期大学 学長 稲垣 安二

百年の日体を記録に刻んで上梓できることを、この上なく喜ばしく、誇りに思う。この百年は日本にとっては諸外国に例のない波乱多き時代であったが、わが日体にとってもまた順風満帆の航海とは言えず、少なからぬ曲折波乱の歴史を辿ってきたのであって、体育・スポーツ全盛期ともいえる今日における本学の隆盛が常に続いてきた訳ではない。もとより、歴史記述は単に過去の史実を再現することではなく、無数の事実を遡及・選択するなかに歴史的経緯の本末を見極め、その反省の上に将来の方向を示すことである。その意味で百年の歴史は次の百年の日体を創りだすものと言えよう。

六千余の学生、五万余の卒業生を擁する本学は、時代思潮の変遷に応じてその直接的な存在意義も変転してきたが、創立百周年を銘記するとき、体育により身体健やかに、スポーツによりこころ明るく、穰り豊かにして平和な社会を築くことを目指して躍進し続けることを改めて誓いたい。この精神を良しとして集まる学生のある限り、人々が健康な幸福を希求し続ける限り、本学の歴史の絶えることはあり得ない。それ故に新たな歴史を創り出すわれわれの責任の重さを感じる。

散逸した資料を発掘・収集し編纂作業の苦難を克服された関係各位に深く感謝と敬意を表して発刊の序としたい。

# 新たなる発展を期して

日体荏原高等学校 校長 加藤 正春

学校法人日本体育会・日本体育大学が本年創立百周年を迎えたことを心から祝福し、また新たな飛躍的な発展を期待すること切なるものがある。この百年を顧みれば、前半五十年は日清戦争から太平洋戦争につながる戦争の時代といえようか。日本体育会にとっては非常に困難な時期でもあったが、「体育は富強の基」という理念を貫いて、数多くの優秀な体育指導者を養成し、国の発展に寄与した功績は大である。後半五十年の今日に到る時期は、日本体育大学がとくに体操を中心に、その名を世界にとどろかせ、飛躍的發展を遂げて来た。また日本体育会傘下に、さらに短大・高校・専門学校・幼稚園が創設され、大發展をみた時でもある。高等学校は本校を含めて四校が、それぞれの特徴をあらわしつゝ、發展をつづけている。とくに本校は、明治三十八年創設の荏原中学校を前身とし、本年創立八十七年を迎えた。日本体育会の百周年記念事業の一環として建築した新体育館は、父母・同窓生の絶大な協力を得て、堂々たる偉容を誇っている。そして部活動の成果をさらに挙げ、日本体育大学との連繫を目指しつゝ、次の百年の歴史の中に突入して行こうとしている。

# 指針の書

日体桜華女子高等学校 校長 丸山 外史

学校法人日本体育会百年の歴史の中で、日体桜華女子高等学校が誕生してから三十三年経過しました。この間、体育会本部、教職員、生徒が一体となって精進し、今日の発展をみる事ができました。

人には歴史がありますが、自己の現在を視るだけで自己の全体像を知る事は不可能です。学校も同じく法人の歴史と学校の足跡をたどることによって、はじめて全体像を把握することができます。『学校法人日本体育会百年史』は過去を見て現在を探り、また未来をも洞察して、新しい着実な歩みを更に進める指針となるのは確かであり、折にふれ繰返し読むべき指針の書であると考へ、本書の刊行を心から慶賀致します。

# 日本体育会の栄光を祈る

柏日体高等学校 校長 廣原 忠廣

学校法人日本体育会創立百周年の光輝ある年を迎えて、関係諸学校の施設設備の拡充・整備も進展し、とりわけ健志台キャンパスにおいては近代設備を駆使した大学の殿堂が完成に近づきつつあるとき、『百年史』の刊行をみるのは大変喜ばしく、心強い限りである。

日本体育会が今日の隆盛・発展をみる事ができるのも、過去の幾多の先人達の汗と涙と埃の結晶であり、更には百年の歴史と伝統を永々と継承されてきた歴代経営者はじめ、米本卯吉先生の教育理念を体して指導にあたられた諸先生方の努力と、同窓各位の情熱溢れる母校愛・苦心の賜であらう。

近年、高齢化が進む中で、生涯を通して健康で豊かな人生がおくれるようにと体育・スポーツへの関心が高まりつつあることは喜ばしい限りであり、生涯スポーツに親しみ、実践する態度を養わせる指導者の育成、そして人間性豊かな国民社会を育成するためにも日本体育会の果す役割はいよいよ大なるものがあると思う。

百周年を契機に、相互がより一層の研鑽・充実をはかり、世界からも注目される日本体育会並びに大学が築かれることを念願するとともに、創立百周年の歴史と伝統の上に新しい一頁を加えられて今後の発展と躍進を祈るものである。

# 百年史の発刊を祝う

浜松日体高等学校 校長 松井 哲

学校法人日本体育会百年史の発刊を心よりお祝い申し上げます。

一世紀に及ぶ日本体育会・日本体育大学は、時代の変遷と共に、若干の迂余曲折を強いられてまいりました。しかしながらこの間の一貫してわが国の国民体育の振興とスポーツの発展へ寄与された実績は、まことに大きなものであります。そして今、滔々たる流れをなして躍進を遂げ続けておりますことは、まことに慶賀にたえません。しかもこれが、単なる時の流れのなすものではなく、幾多先人、先達の血のにじむご努力の累積であったことを思います時、百年という歴史の重みをいやが上にも感ずるのであります。

今やわが国の中等・高等教育界は、就学人口急減という困難な時期にさしかかっています。日本体育会傘下の各設置校が、先人の培われた日体精神を基に、叡知と努力を傾注し、この難局を乗り越え、それぞれ発展進歩の道を歩まれますよう念願致します。

日本体育会・日本体育大学は、ここに編まれた日本体育会百年史の語る歴史と伝統を、新しい施設と理念のもとに継承され、燦然たる光輝を放つ体育・スポーツのメッカとして彌栄えますよう心から祈念するものであります。



# 百年の年輪

日体幼稚園 園長 村上 春夫

木は百年の老木になっても、一年に一度は必ず新芽をふいて新しい木となり、花を咲かせ、実をつけ、新しい年輪をつくります。人間にとつてはまさに驚異です。

日本体育会に刻み込まれた百年の年輪は、この木のように一年に一度確実に花を咲かせ、実をつけてきた先人たちの栄光の印でもあります。

日本体育会・日体幼稚園も三十七年の年輪をもつ木に育ってきていますが、百年の歴史のなかで先人たちが育んできたことを忘れてはならないと思っています。と同時に、その時代時代に日体幼稚園で過ごした子どもたちひとりひとりの年輪でもあることを忘れてはならないと思っています。

今、日体幼稚園は、健康教育を柱に着実に一步一步ゆるやかに年輪を刻み込んでいます。幼児教育の重要性はいまさら申し上げるまでもありません。

人として生まれて、はじめて集団生活のなかで、三歳児、四歳児、五歳児の幼い心は日々大きくゆれ動いています。教師たちは個々豊かな感性をもっている子どもたちと響き合う心を大切に子どもたちの心をしっかりと受け止め幼児教育に専念致しております。これからも日本体育会が示してくれた歴史に寄り添って新しい年輪を子どもたちと共に刻み込んでいきたいと考えます。

# 日体百年と柔整専門学校

日体柔整専門学校 校長 押切 勝義

日体柔整専門学校は柔道整復師養成を目的として昭和四十八年四月に創立された。夜間の専門学校である所から、系列学校の中では、極めてユニークな存在と謂うべきであろう。

古流柔術を原点として日本の歴史に芽生えた「柔道整復術」は、更に中国医学、西洋医学の伝来を巧みに吸収することによって徳川中期において体系づけられ、明治以降の整形外科学の進歩発展に伴い、今日では、法のもとに「柔道整復」として確固たる地歩を占めるに至った。

二十一世紀の医療を考えると、コ・メディカルの見直しが論議されている。高齢化社会の到来、スポーツ医学の多様化を見れば当然のこと、云える。

母体である学校法人日本体育会又その中核をなす日本体育大学は苦難の途を乗り越えて、こゝに輝かしい百年の歴史を刻むに至り、世界の日体としての評価を受けていることは誠に同慶の至りである。「健康は何物にも替難い最高の宝」と喝破されたのは、前理事長米本卯吉先生のけだし名言である。

本校は保健衛生に資する柔道整復師の養成校として法人傘下に位置することに思いを至し、師弟同行を旗印として、灯火のもと、孜々として励む我々は、日体柔整永遠の発展を信ずるものである。

# 『百年史』 刊行によせて

日本体育大学同窓会 会長 高嶋 洸

このたび母校の開校百年という、偉大にして再び巡り来ることのない節目を迎え、編集委員諸氏の努力により『百年史』が刊行されることに、限らない喜びを覚える。

今を遡る百年、体育の必要を口にしながら、実際には体育と体育人を軽視し、且つ体育に関する体制を欠いた時代に、創設者日高藤吉郎先生の明敏を起点に、この途一筋に一貫した連鎖のうちに続いてきた学校も稀であろう。略譜をみるまでもなく百年とは誠に長い道程であった。その道程はまた必ずしも平坦ではなかった。むしろ苦難の連続であったといえるし、悲惨というにふさわしい時代もあった。突然、校舎が人手に渡り、若い卒業生の教師が学生をつれて徘徊したこともあった。また、学校の根幹をなす学生数が百に満たない時代もあった。そんな時に、誰いうことなく学生を母校に送ったのは同窓の仲間であった。

時の流れとともに、過ぎし日のことを忘れがちなのが人の世の常ではあるが、今日のような節目にこそ静かに過去に想をいたし、過ぎし苦難の時代に歯を食いしばって生き抜いた先輩の労を讃え、連綿として絶えることのない後輩に、その一端を伝承し、珠玉の伝統が永遠に輝き磨かれていくことを念願して止まない。

# 百年を考える

百年史編纂委員会 委員長 長田 一臣

江戸時代の「島原大変」から二百年、今また平成の島原が大変である。一八九〇年に画家ヴィンセント・ヴァン・ゴッホが没して百と一年。一八九一日本体育会が創立されて百年が経った。百年を単位としてこれを一世紀という。社寺の縁日の一つに「四万六千日」というのがあるが、天文学では三万六千五百二十五日を含む年数を百年とし、ユリウス世紀と称してこれを使用している。十四世紀中頃から約一世紀間イギリス王家とフランス王家の対立を軸に展開したヨーロッパ諸勢力の対立抗争状態を百年戦争といった。悠久の時の流れに比ぶれば、まことに泡沫（うたかた）の如き時の間に過ぎぬが、人の一生が大約この間に始まって終熄することを惟えば、百年は永い。

日本体育大会の創立は明治二十四年八月十一日であるが、この三カ月前の五月十一日に日本を震撼させる大事件が発生している。いわゆる「大津事件」である。ウラジオストックで行われたシベリア鉄道起工式に出席したついでに日本を訪問したロシアの皇太子ニコライ・アレクサンドロビッチは京都から滋賀の大津市へ行き、県庁を出て五百メートルの地点で警備の任に就いていた巡查津田三蔵に帯剣で斬りつけられた。幸い傷は浅かったが、大國ロシアの皇太子を傷つけたのだから上は明治天皇から下万民に至るまで文字通り上を下への大騒ぎ、「日本大変」となった。この皇太子こ

そ一八九四年に即位してニコライ二世となったその人である。その後皮肉にも、日露戦争によって再び日本に傷つけられ、第一次世界大戦を経てロシアの二月革命で退位、ソビエト政府によって家族と共に銃殺された悲運の皇帝である。「大津事件」を起点としてわが日本体育会の歴史と重なるソ連の百年も激動そのものであった。世界を震撼させたあの社会主義革命すらこの世紀のうちに始まって今また終熄しようとするものである。日本体育会が日本体育大学の前身たる体操練習所を開設したのは一八九三年であるからこれはニコライ二世即位の前年に当たる。日本の欧化主義は明治一〇年を過ぎたあたりから高まるが、この近代化は専ら西欧の知識の吸収という知育に注がれたから、この時代の体育という発想はすぐれて先見的である。そういう時代であるからわが大学もこの百年の間に幾多の辛酸を舐め、紆余曲折があった。ここに編まれた百年史によって本会の苦難の道すじを辿ることができる。

さて、今日、わが国における大学体育の立場が極めて微妙である。また、わが国の子どもの出生率が減少の一途を辿っている。時代的狀況の絡みで学校経営上のもろもろの問題が生じてくる。わが地球上で過去二回にわたって生命が絶滅した形跡があるといわれている。過去百年を生き抜いてきた日本体育大学が二百年、三百年、いや次の世紀を生き残るといふ確実な保証があるだろうかと思ふ。歴史とは単なる伝承ではない。絶えざる創造、血の入れ替え、その時々のペレストロイカが必要なのである。ここに百年を迎え、謙虚に越し方を振り返り、新しい世紀への起点としたい。